

蝮の道

森岡 正作

花に花

地の物に添ふる訛のあたたけし
点と線結ぶにあらず蝮の道
手間暇のことはさて置き胡瓜蒔く
身内透く木の香水の香風光る
飯蛸を喰うに正座を崩しけり
ホルン吹くやうに薇解けゆく
父を抱く父よりでかき合格子

裏の畑の桜が満開である。今は三本になってしまったが、三本とも根元から二股になって、どれもだいたい四十七センチと三十センチぐらいの幹に分かれている。例年横目で「お咲いたな」という程度で出かけていたのであるが、今回のようにゆつくりじっくりと下から見上げていると、正確には「厚ほつたい」であるが「熱ほつたい」とも言え、圧迫を感じる程であった。

そこで、多分登四郎先生には桜の御句がある筈と家に入って探してみると、はたして句集『芒種』に「花に花重ねし贅の中にをり」があり、続いて「花あまた見し夜の臉熱もてり」があった。

いい気分です。また外へ出てみると、乳母車を押す母親と八十年代後半ぐらいのお婆さんが道で花びらを拾い集めていた。それで「小枝を上げますよ」と長さ七、八十センチぐらいのを伐って上げると、乳母車の隙間に差し込み、喜んで帰って行ったのである。